

2008年3月21日  
日本銀行

## 福井総裁退任記者会見要旨

2008年3月19日(水)  
午後7時から約35分

(問) 本日、任期終了で最後の会見ですが、この5年間を振り返りどのようにお感じですか。また、残念ながら次期総裁候補は国会で不同意となり総裁は空席という事態になりますが、これについてはどのように思われていますか。

(答) 本日を以って退任をさせていただきます。5年間、皆様方から大変厚いご支援を賜り、感謝しております。厚く御礼申し上げます。

5年間を振り返っての特別な感想はありません。日本銀行の政策委員会および執行部のマシンは非常によく回転したと感じております。私自身は、このマシンのエンジンの音をいつも確かめながら、専ら前を向いて全力投球、全力疾走してきたと感じています。それ以上の特別な感想はありません。

任期満了の時点で後任の総裁が任命されていないということは、歴史的にも極めて異例なことであり、残念なことだと思っております。二人の副総裁が3月20日付けで任命される運びになっていると思いますので、この両輪が先頭に立って日本銀行のマシンを引き続きしっかり駆動して行ってもらいたいと願っています。

(問) 同じく本日付けで退任される武藤副総裁と岩田副総裁とは、本日はどのような話をされましたか。

(答) 本日、三人一緒に本店の職場を隅々まで回り、5年間非常によく頑張ってくれた職員の皆さんに御礼を申し上げました。三人で話をしたことは特にありません。三人はそれぞれ持ち味は違いますが、5年間の協力体制はしっかりしていたと互いに感じ合っていると思います。

（問） 政府から武藤副総裁を総裁にとの提案がありましたが、その提案が不同意になったことについて、二人で話されたことはありましたか。

（答） 特に話をしていません。

（問） 福井総裁の5年間を振り返り、デフレ脱却を果たしたかどうかという点では色々と議論があり、また金利正常化途半ばという感じですが、これらの点について改めて振り返って如何でしょうか。

（答） 経済の変化については、毎回の記者会見等の場を通じて確認し続けてきており、皆様方と認識を共有していると思っています。一言で表現するのはなかなか難しいですが、5年前に着任した時の日本の経済・金融の姿と現在の経済・金融の姿は異なっています。少なくとも経済については、前向きな循環メカニズムが作動するようになっており、外からのショックに対する頑健性が増してきています。金融についても、金融機関の健全性は回復し、政策金利はまだ低いです。金融市場も金利機能がきちんと働くようになっていきます。最近のサブプライム住宅ローン問題を発端とするグローバルな金融市場の変動や海外経済から起こってきているダウンサイドリスクが日本経済にどの程度影響があるかを、金融市場はきちんと映し出して私どもに見せてくれるようになっていきます。その程度には状況は改善してきていると思っています。

（問） 先程、「副総裁を両輪として」とおっしゃいましたが、総裁代行については白川副総裁と西村副総裁のどちらがなさるのかという点と、それぞれの人物評がありましたら伺います。

（答） 人物評はありませんが、先程、3月20日付けでこの両名が副総裁に任命されるという閣議決定が終わったとの連絡を受けています。それを受けていわゆる総裁代行　こういう言葉があるのかどうか分かりませんが　として白川副総裁、さらにその代理に西村副総裁と考えています。

（問） なぜ白川副総裁なのでしょう。

（答） シニアだということでしょう。

（問） とりあえずは総裁がいない副総裁二人体制ですが、新体制に期待される  
ところがありましたらお願いします。

（答） 当面は、何と言いましても、日本経済あるいは日本の金融資本市場が、  
先程述べたようなグローバルなリスクを上手く吸収していけるような正確な判断  
と対応が必要となります。

先程５年前に比べれば経済も金融も少しは良くなっているという話をし  
ましたが、本当の課題はまだまだこれからです。長期的には、日本経済が製造業・  
非製造業を通じてより高い生産性を実現するような経済、そして全体の潜在成長  
能力が上がっていくような経済になっていかなければなりません。金融について  
も、より適正な資源再配分機能が発揮できるような金融市場に仕上げていかなけ  
ればなりません。課題はいっぱい残っています。従って、長期的な課題を明確に  
設計し、政策委員会および執行部の組織のエンジンの音をより高くしながら、是  
非、強力に引っ張ってってもらいたいと思っています。

（問） 日銀総裁が空席になる影響についてどのようにお考えになるのかお聞き  
します。一点目は、国際的な信認が落ちるとか機動的な対応ができないといった  
指摘がある一方で、金利もそれほど高くないし、サブプライム住宅ローン問題の  
発生地でもないということで、影響はそれほどないということもできるのではな  
いでしょうか。二点目は、こういう状況を考え、日銀法は改正されるべきでしょ  
うか。三点目は、後任を決められなかった政治についてご意見があればお伺いし  
たいと思います。

（答） どの組織でも、どの会社でも、トップを欠いた状態で長い間好ましい運  
営実績を出していけるかというと、誰もが疑問を持つところです。それだけ組織  
に余計に負荷がかかるということだと思います。先程は、有能な両副総裁を先頭  
にこのような負荷をもきちんと背負って前進して欲しいと申し上げたわけであっ  
て、追加的な負担が全くないと申し上げたつもりではありません。

日銀法の議論については、今回の一事をもって、右から左に何らかの結  
論を急ぐということではなく、日本銀行の総裁人事というひとつのケースを材料

にしながら、政治に対する信頼性というものを国民がしっかり確立していく、今後建設的に皆が考えていく、ということのほうが大事ではないでしょうか。将来、再び日銀法に関する様々な課題が出てくるかもしれませんが、何かひとつのイベントを捉えて法律を改正すれば済むといった考え方ではなく、日本の意思決定メカニズムをどのようにすれば、より国民の利益に沿うような運営がなされるか、といった根本を皆でしっかり考えることが私は大事だと思っています。

今の政治の運営体制についてですが、もう退任するからといっても、5年間中央銀行の総裁をやってきた立場から、最後まで政治の問題に対して口を挟むことは避けたいと思います。

（問） 今の質問に少し補足してお聞きしますが、今回の後任人事の問題で日銀の信認が落ちるといふご心配はありますでしょうか。

（答） 今後、日本銀行がトップを欠いた状態であっても、私は役員、職員の実力というものをよく知っていますので、信認が落ちるような運営はなされないだろうと、私は固く信頼しています。

（問） 二点お伺いします。一点は、後任の総裁選びの際、政府・与党から福井総裁の続投という説が民主党側に打診されたという話も出ていました。総裁は、空席になるくらいなら自分があと5年間やってもいい、もしくはやりたいというご意志があったのかどうかをお伺いさせて下さい。また、日銀を退任された後の人生設計ではないですが、今後についてどのようなことを考えておられるのでしょうか。10年前は「世に迷い出る」という言葉も残されましたが、今回はどのようなお気持ちなのでしょう。

（答） 私は、5年間、日銀総裁の役割を果たさせて頂いて、日銀総裁という仕事はやりたくてやるものではない、とつくづく感じています。私は、5年間の任期に全力を注いで全うすることに尽きるものであって、そこに余力を残しているとか、さらにやりたいという気持ちを持ったことは一度もありません。また、私はそういう再任の打診を受けておりません。

これから先どうするかは何も決めておりません。これからよく考えます。もう迷い出るというような年頃でもありませんので。

（問） この５年間で最も印象に残る出来事等がありましたらお話下さい。

（答） 多分、皆さまも覚えて下さっていると思いますが、５年前に着任した時の日本経済、日本の金融の姿というのは、本当にどこに出口を見出していくか思い悩むような状況でした。おまけに着任の日にイラク戦争が始まるという、いわば非常時対応から物事を始めました。そのことを思い出してみますと、私の任期中にいわゆる量的緩和から脱却できるのか、このことすら考えると恐ろしいという気持ちで仕事を始めたわけです。従いまして、３年ほど経過した時点で量的緩和から脱却し、新しい金融政策のフレームワークというものを打ち立てることができ、その後、政策金利の水準は低いけれども金利機能がしっかり働くマーケットというところまで何とか漕ぎ着けた、ということが印象に残っております。

先程、金利正常化が途半ばではないかというご質問がありました。途半ばかもしれませんが、正常化を急いで失敗するよりは、やはり確実な判断で進んでいった方がいいと思っております。やり残した仕事は沢山あることは間違いありません。しかし、私は５年間という任期中にエネルギーをフルに注いでおりますので、やり残した仕事をさらにやるだけのエネルギーは残っていないと思っております。

（問） 福井総裁はこの席でも、「イノベーション」や「ニュービジネス」という言葉を頻繁に使われていたかと思うのですが、もし仮に、福井総裁が民間企業のトップになった場合に、現状と照らし合わせて、将来性のあるビジネススタイルのイメージみたいなものがありましたら、お伺いしたいと思います。

（答） 私が言っていた「イノベーション」とは、製造業における狭い意味での技術革新のみならず、もう少し広い意味で、非製造業における生産性向上につながるような、「知識創造」という意味も含めた言葉です。「知的創造」と言ってもよいと思いますが、そのようなものまで含む幅広い概念であります。日本の産業をみていますと、製造業部門はイノベーションの力が相当強いと思っておりますが、製造業に比べると非製造業部門におけるイノベーションの力は、まだまだこれから伸ばす余地があるのではないかと考えています。それを実現してこそ、少子高齢化時代にこの問題を克服し、より強力に進んでいけるのではないかと思います。

ます。また、グローバル競争に打ち勝っていけるより強い経済体制ができるのではないかと考えています。個々の経営においてそれを実現していくに当たっては、多くの優れた経営者が今後さらに現れてくることが大変重要だと思いますし、経営者だけでなく様々な職場で働く人達が、新しい仕事のやり方を目指し従来よりも工夫を重ねていくことが、近道ではないかと考えています。

（問） 日銀総裁の後任が決まらないということは異常事態であり、本来なら金融市場が荒れるなり何なりあってもいいはずなのですが、ほとんど反応していないと言ってもいいと思います。中央銀行のトップが決まらないという異常事態に金融市場が反応しないということを、どのように受け止めたら良いのでしょうか。

また、「５年間お疲れ様でした」という質問が多いのですが、自分でこれが一番思い出に残って良かったという点と、これは大変悔やまれるという点をそれぞれ挙げて下さい。

（答） トップが独裁的に運営している中央銀行であれば、トップが決まらない場合、市場が急激に反応を起こすと思いますが、政策委員会、執行部という重層的な構造を持つマシンがしっかりしている中央銀行の場合は、トップが一時的に決まらないからといって、市場が急激な反応を起こさないということは、さほど不思議なことではないと思います。

しかし、日本銀行にはそれだけ余計に負荷がかかっていると申し上げました。余計にかかっている負荷をしっかりと担っていかなければならないこれからの日本銀行にとっては、もう一段エンジンを駆動させていくには重い力、強い力が必要だと思っています。

それから、何が良かったか、何が良くなかったかといった細かいことまで今は整理できておりません。いつも申し上げている通り、振り返って色々と自己点検をするのは、私の行動パターンの中にあまりビルトインされておりません。皆様方でどうぞ自由に評価するなり批判するなりして下されば良いと思っております。

（問） 退任にあたり、世界の中央銀行仲間、例えばF R B議長と直接お話をされたようなことはありますか。もし話をされているとしたら、総裁が空席となり後任はとりあえず代行になるということについて、あとを託すというような意味

合いの言葉はあったのでしょうか。

（答） 3月に入ってからB I Sに行き各国中央銀行の総裁と会いました。私の任期が3月19日にくるということは皆さんご承知で、私からは、今までのご協力に感謝するということを一人一人丁寧に申し上げて参りました。グローバルな金融市場で「動揺」といった表現が当てはまるような問題が生じているわけですので、私どもの過去の苦痛に満ちた経験とその問題にどう対処したかということのほかに、現在の市場の動揺について私が頭の中で整理しうる限りのことは整理して話をし、議論してきました。これが私の最後のB I S出張での言わば置き土産のようなものです。ただ、中央銀行の総裁仲間とは、グッドフレンドとして今後も良好な関係が続くと思いますが、日本銀行の仕事そのものとは切り離れた関係、割り切った関係になると思います。

（問） 世界市場の見解についてお伺いします。夏のサブプライム住宅ローン問題の混乱以降、世界の市場の現状認識について、総裁は会見で、価格発見機能のプロセスにあるという見解を示していられましたが、現状、その価格発見機能は機能していると言えるのでしょうか。ご見解をお願いします。

（答） 以前も、リスク再評価の過程、バリュー（価値）の再評価の過程であると申し上げましたが、その過程が今も続いていると思います。ただ、米国経済を中心に引き続き景気の底が見えにくい状況にあり、各種資産の価格についても下落速度が高まり底が見えにくい状況にあります。このような状況を眺め、様々なマーケットで投資家のリスクを取る姿勢がかなり慎重化しています。いわゆるマーク・トゥー・マーケット（時価評価）と言いますか、市場のフェアバリュー（適正価値）を見出しそこに瞬時に到達するといったような条件がまだ整っていないため、市場関係者が大変苦労しながら新しい均衡価格を模索し発見していく過程が続いています。その過程では、再評価した以上、減損処理をしなくてはならず、資本にくい込んだ部分については資本の手当てもしなくてはなりません。単に価格の値札を付け替えるというだけではなく、値札を付け替えたならば減損処理と資本手当てが必要になるという苦しい過程がしばらく続くということではないかと思っています。しかし、実体経済と市場価格の新しい均衡値は、いずれ両者が収斂するかたちで見出されていくことに間違いはないと思っています。

（問） 一点目は、先程、やり残した仕事がたくさんあるとおっしゃいましたが、いくつか具体的に教えて頂けますか。二点目は、日本の金融・経済にとって、今後、世界の中で競争をしていく上で、どのようなことが課題になるのでしょうか。

（答） これまでも申し上げている通り、金融政策というものは一連のものであっていつかピリオドを打つというのではなく、期末という概念がありません。従って、何をやり残したかと聞かれましても、これは非常に難しい質問です。完成形といったものはなく、将来を読みながらやっていかなければならない仕事というものは、無限につながっているという意味で申し上げたわけです。

次に、これから先どのような課題があるのかとおっしゃいましたが、グローバル経済が完全に均衡がとれ、持続可能な成長軌道にきちんと乗っているかということ、個人的には、今の様々なリスクの発生、あるいは調整局面のあらわれは、グローバル経済がインフレを招くことなく、同時にダウンスайдリスクが目の前に迫るということもなく、グローバル経済全体として比較的落ち着いた持続可能な成長軌道は何かを探し求めるプロセスが始まったということだと思っています。

ここ数年、中国、インドをはじめとする大きなエマージング諸国が成長エンジンとなって強力に世界経済を引っ張り、4%を越え5%近くの高成長で数年走ってきたわけですが、これが安定成長軌道と言えるかどうかです。原油価格あるいは資源価格の高騰などを通じてみる限り、持続可能な成長軌道であるかどうかは未確認です。それでは成長を減速させればよいのかということ、必ずしもそうではありません。つまり、エマージング諸国のエネルギー消費効率、原材料の使用効率等をみますと、非常に効率が悪いわけですから、これらの効率を上げていくことは世界経済の成長ペースの要調整幅を少なくしていくことになりますので、新しい均衡は、省エネ、省資源あるいは環境対応がどの程度進むかということと関係し、複合的な関数の解を求めていくようなことではないかと思います。

金融市場については、今後ともイノベーションが進むと思いますが、イノベーションの技術は、今までは、どちらかというと不動産取引を証券化するといったような方向に多く使われ過ぎてきたと感じています。企業自らのビジネスモデルの変換や企業再編を通じて将来のキャッシュフローを生み出す姿形が変わり、企業が将来生み出すキャッシュフローの割引現在価値を市場が正しく認識し



た上で、これを証券化商品にして正しい値付けをし、多くの投資家がリスク度合いを分散させながら自らポートフォリオを組んでいく、といったような金融システムを、それぞれの国において作っていく必要があります。

イノベーションの使い方が不動産取引に偏らずに、本来的な企業価値を如何に生み出していくか、将来生み出す企業価値を金融市場できちんと評価できるか、多くの投資家がポートフォリオに組み込めるような証券化技術を如何に発達させていくかなど、多くの課題があると思います。それらが、新しい世界経済の均衡ある安定成長軌道と望ましい金融市場の両者の整合性をとるのではないかと、私は思っております。

（問） 経済財政諮問会議等、様々な政府の経済の議論にも参加されてこられたと思います。その中で、昨今、日本の改革意欲が後退しているのではないかという論調が海外の新聞等でも目立ってきました。この辺りをどのように認識されているのか教えて頂けますでしょうか。

（答） 私は、議論のペースが従来に比べて落ちていると思っております。諮問会議の提案が与党の政策体系に取り入れられ、実行に結びつく時間的距離が比較的短かった頃の状況に比べると、与野党逆転といった現在の政治構造の中で、政治的プロセスが複雑化していると思っております。諮問会議のペースが遅くなっていると捉えられがちなのは、そのためではないかと思っております。これは非常に難しいことであり、諮問会議が少し弛んでいるということではないと思っております。

（問） 日本経済全体の改革意欲という意味で如何でしょうか。

（答） 今私が申し上げましたように、この先改革意欲をしばらく押し入れにしまっておくとか、ゼンマイを少し緩く巻くといったようなことを行う余裕はやはりないのではないかと思います。人口が減り、少子高齢化が進み、財政再建についても重い課題がある、といった日本の状況を考えますと、先程申し上げた通り、改革を進めできるだけ広い範囲で生産性を上げる、といったように経済の仕組みを変えていく以外に、世界的な厳しい生存競争に打ち勝っていけるようなたくましい構造をつくる方法はないのではないかと思います。時間的余裕がどの程度あるのか認識を共有し、前向きな努力を刺激し合うような社会の仕組みが必要では

ないかと思います。日本はかなり豊かになっていますから、しばらくは大丈夫ではないかといった気持ちもどこかにあるという気がしないでもないのですが、そうしたことではいずれ競争に負けるリスクがあると思います。

（問） 福井総裁が後任はいないと確信されたのはいつごろでしょうか。また、正式に後任が空席になるというのは、政府・与党からいつごろ連絡があって、どういうかたちで話があったのか、後任人事の選定の時間軸について、何かお話があったのでしょうか。例えば今度のG7は白川副総裁にとか、そういった話はあったのでしょうか。

（答） 後任が空席になるということは、本日の参議院本会議で否決されたという事実を知った時であります。この後どうするかということについては、新体制が決めていくということだと思っております。

（問） 改めて政府から連絡というか、福井総裁にお話はあったのでしょうか。

（答） 空席になるといった連絡はありませんでした。国会が否決したという事実は、皆さまの報道ですぐわかった次第です。

（問） 政府・与党が、野党も含めて、次期総裁についてどのような人がふさわしいのかということで頭を悩ませているわけですが、改めて総裁の目から見て、次の日銀総裁にふさわしい人、これはどういう資質を持った方なのか、それに加えて、民主党等を含めて財政と金融の分離という観点から、財務省のOBはふさわしくないという意見もあるのですが、それは次期総裁としての資質を欠く要因になり得るのか、お伺いしたいと思います。

（答） これまでの記者会見でも何度かお答えした通りであり、考え方は変わっておりません。通貨価値の安定に対する強い決意、市場を愛する心、市場を大切に  
する心、そして、このようなグローバルな時代ですので、グローバルな視野を  
しっかり持った人、政策委員会を民主的に運営できる人、恐らくこれに尽きるの  
であり、そうしたことができる人であれば、どのような出自であるかは関係ない  
と思います。

（問） 退任された後の人生設計は考えていらっしゃるということですが、今日終わって何かやりたいことがありますか。

（答） 今日はビールを一杯飲みたい気分ですが、特別の予定はありません。

以 上